意志動詞・無意志動詞

いしどうし・むいしどうし

volitional verb / non-volitional verb

文法

意志動詞とは、意志的にコントロールできる動詞を言い、無意志動詞と対をなす。自己制御的動詞と呼ばれることもある。一般に、命令形、意志形、「てみる」「ておく」のような表現が使えるのは意志動詞である。

【意志動詞の種類と用法】たとえば「折れる」と「折る」のように自動詞と他動詞が対応する場合、「折れる」のような自動詞は無意志動詞であるのに対して、「折る」のような他動詞は意志動詞である。人間が主語になる場合には、目的をもってほかにはたらきかける点で意志動詞としての用法となる。なお、「歩く、励む」のように意志的な自動詞もある。

【無意志動詞の種類と用法】無意志動詞には、「欠ける」などそもそも動きを表さない動詞、可能動詞、自発的な感覚の動詞、「砕ける」など非人間主語の動詞などがある。人主語の動詞でも、「間違う」などマイナス価値の動き、「悲しむ」など心因的なもの、偶然性に依存する「知る」、外面観察的な「寒がる、たたずむ」などは、無意志的な動詞である。

ただし、意志か無意志かは用法に関わるのであって、「古家を壊す」のように意志動詞と言える動詞でも、「落として時計を壊す」のように、用法によって無意志的な用法を持つ場合がある。これには価値性が関わる。

【関連表現】「書け」のような命令形、「書こう」のような意志形、「てみる・ておく」による試行性や準備性のほか、「書こうとする」のような意志発露、「書くことにする」など意志決定などの表現が関わる。使役の表現では「彼 {*に・を} 悲しませる」のように重なるヲ格がない場合、ニ使役は一般に意志動詞である。また「滑って転んだ」のような原因事態の解釈のテ形の接続はふつう無意志動詞である。

［文献］森山卓郎『日本語動詞述語文の研究』（明治書院 1988）

［森山卓郎］

位相語

いそうご

register-specific language

社会

1つの言語の中にある多様性（バリエーション）を示す用語。社会集団や使用場面によって異なることば（特に語彙）のことを言う。菊澤（1933）は、水が固体である時には「氷」、気体の時には「水蒸気・湯気」のように、物理化学的には同じ物質であっても、位相（register）が異なればそれを表現することばが変わる。これと同じように、同じ意味を表すのにも、社会の位相が異なれば異なったことばが使われるとし、社会的位相ごとのことば（位相語）を研究する分野（位相論）の必要性を主張した。

菊澤はことばの位相に関する研究を、社会を背景とする狭義の位相論である「様相論」と、音声言語・文字言語のような表現様式を背景とする「様式論」の、2つに分けている。これを社会言語学（変異理論）の視点と用語に近似的に置き換えれば、前者は言語使用者の属性によることばの多様性（地域方言や社会方言）、後者は同一言語使用者が使い分けることばの多様性（スタイルなど）を探る分野である。このうち様相論については、菊澤はさらに、①社会的・心理的（階級方言・特殊語）、②地域的（（地域）方言）、③生理発達的（児童語）に下位分類する。

田中（1999）は、菊澤（1933）に具体的な記載のあまりない様式論も含めて位相全体を見直し、位相差が生じる要因を、強弱をもちつつ重層的にはたらくと注記しつつ、以下の3つに分けている。

社会的位相	性別、世代、身分・階層、職業・専門分野、社会集団によるもの
様式的位相	書きことば・話しことばの差異、文章のジャンル・文体の差異、場面・相手の差異、伝達方式の差異によるもの

慣用句

かんようく

idiom

語彙

複数の語が慣用的に組み合わされて語彙化した表現で、語の結合全体が1つの語彙項目となっているもの。用言を含むものが多いが、「うりふたつ」「海千山千」のように名詞（ただし主語になりにくい）によるものもある。

連語関係の固定性と意味の不透明性（非構成性）から特徴づけられるが、「原義」をどう考えるかによって慣用句かどうかの認定には連続性もある。ただし、ことわざや標語など、一文としての主張があるものは、一般には慣用句とは呼ばない。

【固定連語的慣用句】「間髪を入れず」「口が悪い」「心配をかける」「いざという時」などは、連語関係の固定性から、固定連語的慣用句として位置づけられる。たとえば「*間髪を入れる」のような固定性を破った表現はできない。「口が悪い」も同じ意味では「大きな口が悪い」「悪い口」のようには言わない。これは「口」の意味がメトニミー（換喩）的に「（評価的な）話し方」へと転義しているからである。

この例のように「口」の原義をどう認めるかにも関わって、固定連語は一般的な連語とも連続している。ただし、たとえば一般連語の「テレビを切る」などは文字通りカッターで切るわけではなく、「スイッチを切る」ことを表す点でメトニミー的転義があるが、「ラジオ、エンジン」などほかにも使えること、「切ったテレビをつける」のように用法に一定の自由度があることから固定連語とはしない。

また、「{呪い／電話／心配} をかける」の「かける」のような動詞は、実質的意味が規定しにくく、機能動詞と呼ぶことがあるが、ともに使う名詞の種類に制約が大きい点で、固定連語を構成する場合がある。ただし「心配をする」のような「する」も機能動詞だが、一般性が高い点で、通常は慣用句には分類されない。

【比喩的慣用句】一方、連語全体で（比喩を典型とした）転義があるものは比喩的慣用句と呼ばれ、意味は不透明である。比喩による点で外国語でも同様の発想のものがあるものもある。固定連語に対して、比喩的慣用句は全体での転義がある。たとえば座り方を表す「あぐらをかく」は固定連語的慣用句であるが、「今の地位にあぐらをかく」のような用法になれば、ニ格を取って「よい地位・立場に安住して努力をしない」という別の意味になる点で比喩的慣用句である。

ただし、比喩的慣用句は、狭い意味での比喩に限られるわけではない。たとえば「岩の間から新芽が顔を出す」のような「顔を出す」は擬人的なメタファーによる比喩的表現だが、「会議に顔を出す」の「出席する」という用法では比喩というよりもメトニミー的である。ただし、いずれも、全体として転義的な意味になっており、句としての意味は、部分の要素の意味から単純に合成されない。

比喩的慣用句の比喩的転義は慣用的・固定的であることにも注意が必要で、たとえば「頭でっかち」は「頭が大きくて賢い」ではなく「理屈・知識しかない」といったマイナス評価的意味に限られている。こうした固定性は、ステレオタイプ的評価にも繋がる点で、人権的に問題が指摘される表現もある。

【固定性】慣用句は、特定の構造で使われる、順序置換・自他変換・肯否変換などの文法操作を自由に受けない、などの用法上の固定性（凍結性）がある。たとえば「喉から手が出る」は「〜ほど（欲しい）」という形で使われるのが典型的であり、「*手が喉から出る」のような順序置換、「から」「より」の置換、否定表現などはできない。

ただし、この固定性は、個別の特性による。「恩を返す」に対する「*恩が返る」はないが、「世話を焼く」に対する「世話が焼ける」があるなど一般化は難しい。

〔文献〕宮地裕編『慣用句の意味と用法』（明治書院 1982）

〔森山卓郎〕

数量表現

すうりょうひょうげん

quantifier expression

文法

数量詞を用いた各種表現のこと。具体的には、a「学生が3人いる」、b「3人の学生がいる」のような各種の構文を指すことが多い。a・bの例を比べると数量詞が副詞性と名詞性を持っていることが分かる。英語では‘three students’のように名詞を数が直接修飾する。よって日本語においてもbの方を基本とし、aは数量詞が名詞から離れているため数量詞遊離構文と言われていた。こういった英語基準の見方に対して現在ではaが日本語の基本形だというのが定説で、遊離といった呼び方は消えつつある。上記二形式の違いを扱った論文は非常に多いが、bは何らかのまとまりを表す文脈で用いられるとされている。そのほかにも数量表現にはc「学生3人が…」、d「学生の3人が…」という形式もある。cは新聞でよく用いられ、「学生3人、教員2人、職員2人が…」のような列挙形式が好まれること、dは「岩田、山内、橋本の3人が…」と固有名詞を受ける用法が多いことなども分かっている。

数量表現には代名詞的用法もある。e「クラスに岩田、山内、橋本がいる。3人は仲が悪い」のような例がそれで、e文中の「3人」は直前の参加者を指し、人称代名詞と同じ機能である。文学のジャンルでは、こういった用法が高頻度で現れる。少し視点を変えて、台湾東部に残る日本語基盤のクレオール（混合語）の例を見ると、一人称代名詞の複数・包括形に「hutaritaci」という形式があり、「二人」に「たち」を付加したものが用いられている。数量詞と人称代名詞の近さが分かる例である。

［文献］岩田一成『日本語数量詞の諸相―数量詞は数を表すコトバか』（くろしお出版 2013）、簡月真「日本語を上層とする宜蘭クレオールの人称代名詞」『日本語の研究』14-4（2018）

［岩田一成］

スコープ

scope

文法・意味論

作用領域。一般にある機能が作用する領域という意味で使われる。文法的には否定や数量詞などの論理関係を表す語がどれだけの範囲を対象とするかなどを指す。係り受け関係や副助詞の用法などについて使われることもある。

たとえば、「すべての教授は1人の学生が好きだ」という文には数量表現の及ぶ範囲から2つの解釈が可能である。1つめの解釈は、ある特定の1人の学生について、「すべての教授が好き」という関係が成り立つとするもので、この場合には「1人（の学生について）」という数量表現の方が広いスコープとなっている。一方、すべての教授についてそれぞれ1人ずつの「好きな学生」がいる、という解釈の場合、「すべて（の教授について）」という数量表現の方が広いスコープをとっていることになる。

否定の場合も、「私は悲しくて泣かなかった」という場合、「ない」は「泣く」だけに作用しているが、「［私は悲しくて泣いた］のではない」となると、「［私は悲しくて泣いた］＋の」のように「の」でまとめられた部分全体に作用し、「悲しくて」を否定することができる。

副助詞によるとりたての場合も「ご飯だけ食べた」という場合、「ご飯」だけに限定する解釈のほかに、「ご飯だけ食べて帰った＝ご飯を食べるだけで帰った」のような全体を取り上げる解釈もある。後者の場合は「だけ」はその後ろも含めて出来事の全体を領域としている。こうした構造は古典語でもよく見られ、たとえば「夜や暗き」の「や」は、「夜」につくが、疑問としての領域は文全体となっている。

［文献］久野暲『新日本文法研究』（大修館書店 1983）、野田春美『「の（だ）」の機能』（くろしお出版 1997）、沼田善子『現代日本語とりたて詞の研究』（ひつじ書房 2009）

［森山卓郎］

英日対照表

【A】

abbreviation　略語
accent　アクセント（現代語）
acoustic phonetics　音響音声学
address term　呼称
addressee honorifics　丁寧語
adjacency pair　隣接対
adjective　形容詞
adnoun　連体詞（副体詞）
adverb　副詞
affix　接辞
agreement　一致
alexia　失読症
allegory　諷喩
allophone　異音
alphabet　アルファベット
antonym　対義語
aphasia　失語症
arbitrariness　恣意性
articulatory phonetics　調音音声学
aspect　アスペクト（相）
aspiration　気息
attitudes towards dialect　方言意識
attitudinal expression　待遇表現
auditory phonetics　聴覚音声学
autonomous word　自立語
Aynu（Ainu）　アイヌ語

【B】

base　語基
basic vocabulary　基礎語彙・基本語彙
benefactive expression　授受表現
bibliography　書誌学
borrowed word　外来語
braille　点字

【C】

case　格
case particle　格助詞（格助辞）
catathesis　カタセシス
character　文字
character form　字体
character shape　字形
character type　字種
clause　節
clear sound　清音
clipped word　略語
clitic　接語
closed syllable　閉音節
coda　尾子音
cognitive linguistics　認知言語学
cohesion　結束性
colloquial style　口語
common language　共通語
comparative linguistics　比較言語学
complementary distribution　相補分布
complex onset mora　拗音
complex sentence　複文
compound sentence　重文
compound word　複合語
concentric circle theory of dialect divergence　方言周圏論
concord, congruence　呼応
conditional allophone　条件異音
conditional expression　条件表現・条件表現（古典）
conjugating verbal suffix　助動詞
conjugation　活用
conjunction particle　接続助詞
conjunctive adverb　接続詞
consonant　子音
construction　構文
context　コンテクスト（コンテキスト）（文脈）